落葉と自殺

手探れど手には取られず眼開けば消えて影無
しさびしあな寂し

自殺といふを夢みてありきかなしくも浮草の
ごとく生きたりしかな

わが眼こそ愁ひの巣なれ晴れわたる秋の日か
げにさびしく瞑づる

夜も晝も愁ふればとてなぞは斯く眸も暗く濁
りはてけむ

窓ひらけばぱつと片頰に日があたるなつかし
いかな秋もなかばなり

あきらかに秋は潮(さ)し來(き)ぬにごりたるわれのい
のちの血の新たなり

枯草のわが身にあはれ血のごとく、夜深き市
街、雨落ちきたる

雨、雨、雨、まこと思ひに勞れゐきよくぞ降
り來しあはれ闇を打つ

かなしげに霧に月照り娼婦等の群れたる街の
わがうしろ影

月の夜の街の夜霧に鳥のごとくさびしき姿行くか何處へ

秋更けぬ落葉に似たるわが愛のかなしき瞳ぬれてかがやく

窓ひとつ北にひらきてうす暗きこの部屋の好さよ友が椅子に倚る

あてもなく見知らぬ街路に歩み入りとある二階に夕飯を食ふ

わづかなる窓のあひさにうす曇るゆふべの空を見つつ箸取る

もの蔭に眠るがごとく郊外の墓地にひと知れずけふも來りぬ

瞑ぢよとてかなしく瞼撫づるごと墓場の樹々の葉の散りきたる

わがめぐり墓場のつちに散りしける落葉はなにの言葉なるらむ

ひろひ來し墓地の落葉の散れる部屋灯かげに獨りねころびて居る

停車場の黒き柱に身をもたせ汝が行く國の秋をおもふかな（五首、友を送りて）

ふり返るなかれといのり人ごみのうしろ姿を
ぢつと見送る

どよめける旅客のなかにただひとり落葉のご
とくまじりし汝よ

東京を人目しのびてのがれ出づる汝がうしろ
影われも然かせむ

別れ來て銀座の街に秋の木々かげ濃き午後を
行けば靴鳴る

秋、飛沫、岬の尖りあざやかにわが身刺せか
し、旅をしぞ思ふ

まだ踏まぬ國々戀し白浪の岬に秋の更けてゆ
くらむ

秋かぜの紀伊の熊野にわけ入らむ鳥羽の港に
碇をあげむ

法隆寺のまへの梨畑梨の實をぬすみしわかき
旅人なりき

大和の國耳なし山の片かげの彼の寺の扉をた
たかばや此の手

十月、十一月、相模の國をそこここと旅しぬ、
歌三十一首。

茶の花を摘めばちひさき黒蟻の蕋にひそめり
しみじみ見て棄つ

わが身は地、畑のくろつち、冬の日の茶の花
のなどしたしいかなや

秋の相模に畑うつひとよ、汝がそばにわれ草
抜かむ、旅のひと日なり

歩み居れば森もいつしか盡きにけりいざ歸ら
ばやいざ歸らばや

松ばやし暴雨風に仆れし木をさがす相模の友
の背丈のたかさよ

相模の秋おち葉する日の友が妻わすられぬ子
に似てうつくしき

縁がはの君が眞紅のすりつぱをふところにし
て去なむとおもふ

ほどもなく動きいだせる夜の汽車の片すみに
われ靜かに眼をとづ

膝に組む指にいのちをゆだねおきて眼をこそ
瞑づれ秋の夜汽車に

あをあをと海のかたへにうねる浪、岬の森を
わが獨り過ぐ

浪、浪、浪、沖に居る浪、岸の浪、やよ待て
われも山降りて行かむ
地よりいま生れしに似る、あを海にむかひて
語るふたつ三つの言葉
またもわれ旅人となりけふ此處のみさきをぞ
過ぐ可愛しきは浪
うねり寄る浪に見入ればゆらゆらと浪のすが
たしこころ悲しむ
見てあれば浪のそこひに小石搖れ青き魚搖れ
わが巖うごく

海にひとつ帆を上げしあり浪より低し悲しや
夕陽血に似て滴る
朱のいろの浪かなしけれ落日に眼瞑づればお
つる涙のあつさ
港の岸ちひさき旗亭、船を見て林檎嚙み居れ
ば煤煙落ちきたる
港には浪こそうねれ夕陽は浪より椅子のわが
顔に映ゆ
木の花のごとく匂ひて明けてゆく夜はうらが
なしはな札を切る

横濱の波止場の端に烏居り我居り烏われを逃れず

冬の日の砂丘の蔭に砂を掘るさびしき記憶あらはるるままに

浪に醉ひしかほろろほろろに我がこころすすり泣きして海邊を去らず

深きより悲哀こころにうかび出づ見よ海のうへに烏啼いて居り

沖津邊に青浪うねる、浪のかげにわが暗きこころ行きて巣くへる

海は死せでありけり、青き浪ぞ立つ、いたましいかなわが見に來れば

わがめぐり濡れし砂より這ひ出づる蟹あまたありて海に日沈む

ただひとり知らぬ市街に降り立ちぬ停車場前に海あり浪寄る

鳶いろのひとみの兒等のゆきかへる日本の港にわれも旅人

黒いろのあやしき鳥よやよ烏ここの港に數おほき烏

行くにあらず歸るにあらぬ旅人の頰に港の浪
蒼く映ゆ

なにやらむさびしき笑ひ浮きいづる片頰にあ
てぬつめたき木の實

うるはしき冬にしあるかな獨りさびしくこも
れる部屋にけふも夕陽す

はらはらと降り來てやみぬ薄暗き窓邊の樫の
葉に殘る雪

はらはらに雪はみだれつうす黑き樫の葉は搖
れ我が窓暗し

絲のごとくけむりのごとく衰へしわれの生命
にふるへて雪降る

雪ぞ降るわれのいのちの瞑ぢし眼のかすかに
ひらき、痛み、雪降る

木に倚れどその木のこころと我がこころと合
ふこともなしさびしき森かな

眼のまへに散りし木の葉に惶しくもの言はむ
とし涙こぼれぬ

たまたまに朝早く起き湯など浴び獨り坐りて
むく林檎かな

庭の冬樹のはだへにあたる薄日のいろ、朝林
檎をもとむるこころ

掌のうへの林檎の重み、あるとなき朝のなや
みに瞑ぢたる瞳

見よあれ、うれしげに手にも持つことか今朝
の林檎のなどてや斯からむ

林檎の眞白き肉にいとちさきナイフをあてぬ
思ひは淋し

林檎林檎さびしき人のすむ部屋にやるせなげ
にも置かれし林檎

おとろへし生命の酸味のひややかに澄む朝な
り手にとる林檎

冬の陽のあたる片頰にひそやかにさしそへて
みぬこの紅き實を

森のなかにちさき畑あり、夕日さす、麥の青
き芽いたましきかな

地よ感謝す汝とし居れば我がこころしづかに
燃えて指も觸れ難し

地よ汝に對ひてわれの坐りしを記憶せよ今日
さびしき日なりき

海の岸にうづくまるもこの森に來て木の根に
居るもわが眼開かず
わが手足われの生命のそのままに今日こそ動
け死なむとぞ思ふ
あはれ廣き森にしあるかな眼をとほくはなち
てはまた瞑ぢて開かず
落葉せる林に入ればいらいらと皮膚こそ痛め
何に怖づるや
死は見ゆれど手には取られずをちかたに浪の
ごとくに輝きてあり

この掌の土とわれのいのちの滅ぶことといづれ
なつかしいづれ悲しき
木の根に落葉かき籍き手をあつる我が廣き額
のなつかしきかな
出づるな森を、出づるな森を、死せるごとき
その顔を保て、出づるな森を
あはれいま煙のごとく燃えいづる朽ちし生命
ぞ觸るるなおち葉
斯く居る間に手足の爪の尺と延びよわが皮膚
森の朽ちし葉となれ

冬の陽は煙に似たり森も似たりさびしきわれ
のうしろ影かな

むぐらもちわが爪先の落葉のかげの地掘りわ
がいのち燃ゆ

土龍來よ地にかくれて冬の陽のけぶれるを見
ざるべし出で來よ土龍

その枝折りこの枝を折り一葉無き冬がれの森
に獨りあそべり

信濃より甲斐へ旅せし前後の歌、十六首。

山に入る旅人の背のいかばかりさびしかるべ
きおもへわが友

おなじくば行くべきかたもさはならむなにと
て山に急ぐこころぞ

問ふなかれいまはみづからえもわかずひとす
ぢにただ山の戀しき

友よいざ袂わかたむあはれ見よ行かでやむべ
きこのさびしさか

さびしさを戀ふるこころに埋れて身にことも
なし山へ急がむ

山戀ふるさびしきこころなにものにめぐりあ
ひけむ涙ながるる

ひとすぢにひとを見じとて思ひ立つ旅にしあ
れば消息もすな

なにゆゑに旅に出づるやなにゆゑに旅に出づ
るや何故に旅に

山に入り雪のなかなる朴の樹に落葉松になに
ともものを言ふべき

雪ふかき峽に埋れて木の根なす孤獨に居らむ
陽も照るなかれ

ただひともと伐り殘されし種子松の喬くしげ
れり春となる山

ただ一羽山に鳥の啼くことも幹にわが影のう
つるもさびしや

枝もたわわにつもりて春の雪晴れぬ一夜やど
りし宿の裏の松に

雪のこる諏訪山越えて甲斐の國のさびしき旅
に見し櫻かな

をちこちに山櫻咲けりわが旅の終らむとする
甲斐の山邊に

見わたせば四方の山邊の雲深み甲斐は曇れり
山ざくら咲く

植物園。

足袋ぬぎてわか草ふめばあぢきなやなにに媚
びむとするこころぞも
木々はみなそびえて空に芽をぞ吹くかなしみ
て居れば踏む草もなし
折しもあれ春のゆふ日の沈むとき樅の木立の
なかに居りにき

歸らむと木かげ出づればとなりの樹かなしや
藤の咲きさがりたる
この額かなしき雨よ濡らせかしものを思ふと
なにも知らぬげ
樅のかげ雨もやみにき立ちいでむおお蕣蟲の
濡れてさがれる
さびしといふ我等がこころむきむきに燃えわ
たりつつ夏となりにけり
はつ夏のときは樹の蔭の地にまろび帽ぬげば
いや戀しさの燃ゆ

植物園の松の花さへ咲くものを離れてひとり
棲むよみやこに

あるとなきうすきみどりの木の芽さへわが悲
しみとなるも君ゆゑ

やるせなきおもひの歌となりもせで植物園に
暮るる春の日

地に寝てふと見まはせば春の木のさびしくも
芽をふけるものかな

葉を茂みしだれて地に影の濃きこの樫の樹に
夏の來にけり

はつ夏の常盤樹のかげのなつかしやこの蔭出
でじ日の照るものを

楠の蔭の暗きを憎み樫のかげのくらきを愛で
つかなしみて居る

身にちかき木の根木の根をながめやりつめた
き春の地にまろび居り

立ち出でつとほく離れて見るときのかの樫の
樹の春はさびしき

四月十三日午前九時、石川啄木君死す。

初夏の曇りの底に櫻咲き居りおとろへはてて
君死にけり

午前九時やや晴れそむるはつ夏のくもれる朝
に眼を瞑ぢてけり

君が娘は庭のかたへの八重櫻散りしを拾ひう
つつとも無し

病みそめて今年も春はさくら咲きながめつつ
君の死にゆきにけり

○

酢のごとき入日に浮む麥の穗の穗さきかなし
や摘まむと思ふ

しとしとに入日やどせる青麥のあをき穗ずゑ
を搖すりてもみる

わが蒼き片頰にあたる血のごときいろの入日
を貪り吸ふも

背のかたに沈む入日に染められて袂もおもく
野を歸るなり

野は入日いばらのかげにありやなし水もなが
れて我が歸るなり

入日あかき野なかの村にひと群れて家つくり
居り唄の聲悲し

夕陽搖り海のうねればうら悲しわが立つ崎も
搖れて沈まむ（五首鎌倉にて）

眼のまへを巨いなる浪あをあをとうねりてゆ
きぬ春のゆふぐれ

眼に映る陸無し岬浪にゆれわがかなしみぞひ
とりたなびく

わだつみの浪の一ひら掌にもちて死なむとぞ
思ふ夕陽のまへに

並み立てる岬のあひにゆらゆらと海のゆれ居
てゆふぐれとなる

いたづらに窓に青樹の葉のみ搖れわれらが逢
ふ日さびしくもあるかな

かなしき岬

うら若き越後生れのおいらんの冷たき肌を愛(め)づる朝かな

笑(え)みながらぢつと見つむるまなざしに青みて夏の朝は來にけり

おいらんのなかばねむりて書くふみに青くもさせる朝の太陽

なにやらむ妹女郎をたしなむる姉の女郎に朝はさびしき

摘みては投げつみては顔に投げうちぬおいらんの部屋の朝の草花

お女郎(ぢょろ)屋の物干臺にただひとり夏の朝(あした)を見にのぼるかな

初夏の朝の廊下のつめたきにまろびて起きぬ若きおいらん

とられたるままのこの手のうす青さ別れともなきこのあしたかな

手もとらず夏の朝(あした)の階子段(はしごだん)うつとりとして降(お)りてこしかな

桐の花うすく汗ばみ日ものぼりわがきぬぎぬ
のときとなりゆく

いつ知らずくるわの戀のあはれさの身にやど
れるにしみじみとする

はつ夏の街の隅なる停車場のほの冷たさを慕
ひ入るかな

われ人もおなじ心のさびしさか朝青みゆく夏
の停車場

しみじみと遠き邊土のたび人のさびしき眼し
て停車場に入る

朝な朝な停車場に來て新聞紙買ふ男居りて夏
となる街

水無月の青く明けゆく停車場に少女にも似て
動く機關車

月の夜の青色の花搖ぐごと人びとの顔浮ける
停車場

停車場のあまき煤煙のまひ來るレストラント
の窓の燒肉

午前九時起きも出づればこの市街はやも五月
の雲にくもれる

青じめり五月の雲にしびれたる市街の朝の若人の眼よ

青いろの酒をしぞ思ふ朝曇る夏の銀座の窓をしぞ思ふ

五月の末、相模國三浦半島の三崎に遊べり、歌百十一首。

あさなあさな午前は曇るならひとて今日も悲しく海をおもへり

海戀ふる心頭痛に戀りゆき午前は曇る初夏の街

戀ひこがれし海にゆくとて買ふシャボンわが蒼き掌に匂ふ朝の街

あらさびしやわが背のかたに少女居りほほ笑める如し海へのがれむ

青色の酒賣る店も東京も見すてて海へいそぐ初夏

明日ゆかむ海思ひをればゆきずりの街の少女もかなしみとなる

わが渡る曇れる海にうすうすと青海月なしつれる太陽

海縁の五月の雲もわが汽船の濡れしへさきも
うらがなしけれ

曇り日の汽船の機關に石炭をつぐ萠黄服海は
わびしき

曇り日やきらりきらりと櫓の光りわがをち方
を漕ぎゆく小舟

曇り日の海のかたへをしのびやかにわが古汽
船浪ぬひてゆく

わが渡る五月の海に魚海月さびしく群れてさ
ざ波もなし

古汽船のあぶらの匂ひなつかしく身に浸み來
て午後の海渡る

わが古汽船雲のかげりの浪をわけさびしき海
をさすよ岬へ

雲深き岬へわたる古汽船のあとより起る夏の
青浪

夏あさき岬のはなに立つ浪のなつかしいかな
わが汽船を搖る

うら若き肺病やみとこもりゐる船室のまどに
うつる夏浪

雲晴るれば海はにはかに紺碧の浪立ちわたり
揺るるわがふね

葉の如く浪に揺らるる古汽船にかなしいかな
やわが濡れて立つ

青葉の岬、ながきなぎさを打ちぬらし雨の走
ればゆるるわが汽船

うす青く雨に尖れる彼の岬へうち寄る浪も悲
しかるらむ

漕ぎよせし小さきはしけのゆらゆらと揺れぬ
て淋しこの古港

浪の穂にかすかにやどる赤きいろ夏の夕日の
なやましきかな

かなしげに浪かきわけてわが汽船入り入日の
港死せるが如し

皐月の、雲のかげりにうすき藍ひきうすき藍
ひき伊豆が崎見ゆ

入日さす岬のはなの汐ひきて青き瀬となりわ
が瞳いためり

ゆふ浪や五月の海の道化者やどかりの子がせ
つせとはたらく

死にゆきし人のごとくもなつかしやこの東明(しのめ)
の岬の藍色

あかあかと西日にうかび安房(あは)が崎(さき)相模の海に
近く寄るなり

少女(をとめ)子の青パラソルよりなほひろき麥藁帽を
着て海に入る

太陽の正面(まとも)の岬、きずつきて血のたる指し貝
ひろふかな

潮引きて崎のするどくなりまさり朝あをあを
と松の風吹く

雲のかげ入日の海はむらさきの酒のもたひと
なりてゆらげる

岬より入日にむかひうすうすと青色の灯(ひ)をあ
ぐる燈臺

あをやかに双眼鏡にうつり出で五月(ごぐわつ)の沖に魚
釣る兒等よ

沖邊なる五月の潮うら悲し双眼鏡に泡立ちて
流る

なつかしく午後二時ぞうつ、風呂(ゆ)やわかむ、
この窓掛にゆるる海の日

燈臺の青いろの灯もともりきぬ啼く音をやめ
よ浪間の千鳥

ゆふされば沖のかたより晴れかかる五月の雲
よ漕ぎゆく舟よ

うす青き海月を追ひて海ふかく沈まばや、岬
雲に入日す

朝なあさな白雲湧きて初夏の岬の森に啼く鳥
もなし

落日見に浪に死ぬともこの崎のきはまるはな
に行かばや、落日

月の出の巖の暗きに時をおき浪白く立ち千鳥
啼くなり

浪に浮き油のしづく燃ゆる如岬の街に入日す
るなり

岬越え不思議の邦にくだるごと灣のすみの灯
の街に入る

椎の若葉や崎の港の小學の女敎師が彈くハン
ドオルガン

岬なる古き港にかつを釣る石油發動船の群る
る短夜

月ひくく空にうかべり、晝なれば浪にうつらず、行くよわが舟

わが眠る崎の港をうす青き油繪具に染めて雨ふる

みな忘れよ崎のみなとのこのひと夜五月の雨がふりそそぐなり

旅人のからだもいつか海となり五月の雨が降るよ港に

ほろびゆくこの初夏のあはれさのしばしはとまれ崎の港に

ゆく春の海になつ浮きそ浪ぞ立つかなしき島よとく流れ去れ

港はや青むらさきの夏の魚鰹ばかりを賣る街となる

ゆたゆたに灣のくまに潮の滿ち入日かなしく崎に浮べり

あを海の岬のはなに立つ浪の消しがたくして夏となりにけり

汐ひけば白くあらはれやがて消ゆ月夜の家に岩見てあれば

やよ海はあをき月夜となるものをわが寢る家
に引くな木の戸を

かなしげに潮のなかをかけめぐる青の小魚に
さす五月の陽

金ペンのさきのとがりの鈍りゆくころともな
りて旅のわびしき

みだれたち冷たく肌に散る飛沫詩人は海はな
どてさびしき

うもれたるわが罪惡のかたかげを慕ひて青く
よるやこの浪

いまぞ今日、蕾ながらに枯れゆきしわが若き
日を海に沈めむ

われみづから鉛のあをききりくちの寂しいか
なや若き日を切る

あはれその鉛の蒼き切り屑の散りて殘らばい
かにとかせむ

晝の海にうかべる月をかきくだき眞青き鰭と
なりて沈まむ

身搖らば青き岬もゆれやせむ晝の月浮くさび
しき海に

わが立てる岬をつつみうろくづもともに嘆か
むさびしき日のため

雲一片二ひら三ひら浮かずもあれ岬に立ちて
わがなげく日に

初夏の雲はただちにわが眉より海に浮ける如
しさびしき岬

さびしさは雲にかくれてあらはれぬかの太陽
も海に似たらむ

海よ搖れよわれのいのちは汝より つねに鮮か
に悲しみて居り

捉りがたき苦痛に蒼くさびはてし我がこの額
をとく碎け浪

浪をもて衣をつくれけがれなくあえかに今ぞ
眼をつぶりてむ

越えくれば岬かなしくきはまりて海となりま
た遠くとほく岬見ゆ

あをあをと雲にかげれる彼の岬このみさきい
ざとびて渡らむ

いたましき色情狂とならむより浪をくらひて
死なむとぞ思ふ

聲高く歌ひ終れば眼のまへの世界は蒼し死ぬ
ばかあらむ
海よ悲しあをき木の實を裂くごとく悔はわが
身につねに新らし
ゆらゆらと地震こそわたれ月の夜の沖邊に青
く死にし岬に
ゆらゆらと地震のわたれば身をくづし戸外の
山を見やるおいらん
死んだよに睡る遊女の枕がみ月も蒼みて梟啼
くなり

耳すませばまこと梟にありにけりさびしき鳥
をきけるものかな
この寢顔開きし小窓に眞青に迫りて山が明け
そむるなり
海わたる鳥のひとみのさびしさか寢ざめもの
讀む若きおいらん
この遊女かならず天く死ぬべけむそち向のか
ほの夏の朝かげ
あたらしきうすむらさきのこの紙幣夏のみな
との朝の遊女屋

わが廿八歳のさびしき五月終るころよべもこよひも崎は地震する

岬なるふるき港のついたちの朝の赤飯宿屋の娘

水無月の崎のみなとの午前九時赤き切手を買ふよ旅びと

切りすてて海に投げ入れよ入日さす岬のはなに古き墓地あり

崎の港の船の問屋のこの少女の眼の大きさよそのすずしさよ

鰹賣ると月夜の海の魚のごと人こそさわげ崎の月夜に

さらさらと蒼き月夜の浪ぞ寄る浪うちぎはに積まれし死魚に

月の夜の灣のすみの砂原に聲のみの人の群れて死魚賣る

海より這ひも出で來て聲青く賣るにやあらむ彼等は死魚を

あんまりに死魚賣る聲のかしましきに月夜のみなとわれも寢られず

魚釣れる岬のひとのあの唄は魚の言葉ならむ
魚の唄ならむ

ひかり無き楕圓の月の海に出づる午前一時の
われのあをさよ

月蒼く海のはてより出でむとす死魚賣る聲を
しばしとどめよ

夜をこめて崎の港に入り來る船は死魚積む船
ならぬなし

月の夜の岬に群れて死魚積める帆前船をば待
てる商人

死魚積みてあまたの船の入り來れば月夜ゆる
がせ港どよめく

みどり兒の死にゆく如く月あをき崎の港を出
でてゆく船

月の夜の海のなかばのうろくづを釣り得し如
くあをき帆をあぐ

ただひとり貝拾ひをれば午後の雲うすうす岬
過ぎてゆくなり

雛啼ける磯邊の午後のひき汐やなまの卵をす
すり貝とる

ひき汐を悲しむ青きやどかりのあしの小きざ
み眞蒼き太陽
洞の暗きに貝とりつかれ見かへれば空にさび
しくあがる青浪
崎に立ち海のかなしきふくらみに岩を碎きて
投げつくるかな
誰となきうらめしき肌刺すごとくうす青き蟹
を追ひめぐるかな
眞裸體に青浪の中にもまれ來て死にしが如し
酒を飲みてむ

○

夏となり何一つせぬあけくれのわれに規則の
ごとく齒の痛む
黒いろの虫のやうなる商人がわが部屋に來て
さいそくをする
うす青き夏の木の果を嚙むごとくとしの三十
路に入るがうれしき
まづしくて蚊帳なき家にみつふたつ蚊のなき
出でぬ、添ひ臥をする

かんがへて飲みはじめたる一合の二合の酒の
夏のゆふぐれ

この熱い朝湯よ汗は出てしまへ青の木の葉の
如くなりてむ

かへるさや酒の飲みたくなりゆくをぢつとは
ぐくみ居るよ電車に

朝さすや買うてかへさにしほれたる夏草の花
を一りんざしへ

皿煙管(きせる)ソースお茶などときどきに買ひあつめ
來て部屋を作れる

わがくせのながいかはやも何とやらたのしみ
となり爲す事もなし

忘れ居し一りんざしの夏花にしんみりとする
午後のひとりよ

朝の飯(めし)すごすまじいぞこの心しんみりとゐて
筆とりてまし

わが好きの眼とづるに似し心地今日もふらふ
ら芝居見にゆく

指先に拭けばなみだにほんのりと汗もまじり
て夏はわびしき

夏の日の芝居の笛のかなしさよはやく夜となれ曇り日となれ

友はみな兄の如くも思はれて甘えまほしき六月となる

水無月や木々のみづ葉もくもり日もあをやかにして友の戀しき

六月末、多摩川の上流なる御嶽山に登りぬ、歌八首。

鐵道の終點驛の溪あひの杉のしげみにたてる旅籠屋

あをやかに山をうづむる若杉のふもとにほそき水無月の川

多摩川のながれのかみにそへる路麥藁帽のおもき曇り日

頰につたふ涙ぬぐはぬくせなりし古戀人をおもふ水上

搖るるとなく青の葉ずゑのゆれて居る溪の杉の樹見つつ山越ゆ

ふるへ居る眞青の木の葉つみとりて瞼にあつる、山はさびしも

おく山の木かげの巖にかかりたるちひさき瀧
を見つつ悲しき

山禰宜の峰の上への家のあさゆふのさびしき飯
を三日食みにけり

○

夏の部屋うつとりと繪本かさねたる膝のほと
りの朝のなやみよ

なかなかに繪を見ることもこの朝のおちゐぬ
むねにかなしかりけり

死にゆきしひとのゑがける海の繪の青き繪具
に夏のひかれる

けふも晴るるか暗きを慕ふわがこころけふも
燃ゆるか葉月の朝空

夏はいまさかりなるべしとある日の明けゆく
そらのなつかしきかな

やはらかき白き毛布に寢にもゆく晝のなやみ
か佛蘭西へ行く（山本君を送る）

巨いなる蜂わが汗の香をかぎて身をめぐり居
り啼聲さびし

わが薄き呼吸も負債におもはれて朝は悲しや
ダーリアの花

うつとりとダリアの花の咲きて居りひとのな
やみを知るや知らずや

肺もいまあはき勞れに蒼むめりダリアの園の
夏の朝の日

とほり雨朝のダリアの園に降り青蛙などなき
いでにけり

とほり雨過ぎてダリアの園に照る葉月の朝の
日のいろぞ憂き

夏の樹にひかりのごとく鳥ぞ啼く呼吸あるも
のは死ねよとぞ啼く

卷末記

○本卷には、明治四十一年七月發行の「海の聲」、同四十三年一月發行の「獨り歌へる」、同年四月發行の「別離」、同四十四年九月發行の「路上」、大正元年九月發行の「死か藝術か」の五歌集の歌を收めた。後に改作されたものが多く、それはすべて改作に從つたから、本卷所載のものを正しと見ていたゞきたい。

○處女歌集「海の聲」は二十四歳早稻田大學卒業直前の編輯になつたもの、序文には「明治三十九年あたりの作より」とあり、更にこの歌集の大部分を收めてある第三歌集「別離」によれば「明治三十七年四月以後」即ちその上京以後の作であるやうになつてをるが、實際はそれ以前即ち中學時代の作若干をも含んでをるやうである。配列は作歌順でなく隨分ひどく前後してをる。第二歌集以後が作歌の順序になつてゐるので、これらをもその順序にすべく思ひ立つたが、それは甚だ困難な仕事であるばかりか、絕對に正確を期するといふことは不可能でもあるので、そのままにしておくことにした。

○第二歌集「獨り歌へる」は發行所が東京でなく名古屋の八少女會といふのであり、且つ大きさの菊版になつてをるのが珍しい。

○第三歌集「別離」はその序文の中に一千首云々とあるが、正確に言へば一千四首を輯めた歌集である。しかしその内容は、大體に於て「海の聲」と「獨り歌へる」とを合せたものに、若干の新作を加へたのであるから、本卷には前二著と重複しない百三十三首だけを收めた。本卷二百四十頁「秋風吹く……」の歌以後がその新作に屬するもので、それ以前は時期から言へば、上卷は「海の聲」に、下卷は「獨り歌へる」に屬すべきものである。それがかうなつてゐるのは、前二著編輯の際一旦捨てておいたものの中から、佳しと思ふものを拾ひ出したのであらう。なほ前二著所載のもので「別離」に洩れたものが相當にあるが、これはその反對と見るべきであらう。

○「死か藝術か」の歌には本卷所載のものより遙かに多くの讀點が用ゐられてをる。しかし、後に自選歌集編輯其他の際に不必要と認めて除去したものが多いので、それらはすべてそれに從ふことにしたのである。

○口繪寫眞の肖像は二十六歳「別離」出版當時のもの。「獨り歌へる」の原稿は原稿用紙に淸書したのを一首々々カードのやうに切りぬいて臺紙に貼りつけたもので、鷲野飛燕氏の所藏。次のは明治四十二年十二月十日福永挽歌（渙）氏名古屋新聞社に赴任の日の記念撮影で、中央は福永氏、向つて右は佐藤綠葉氏である。（大悟法利雄記）

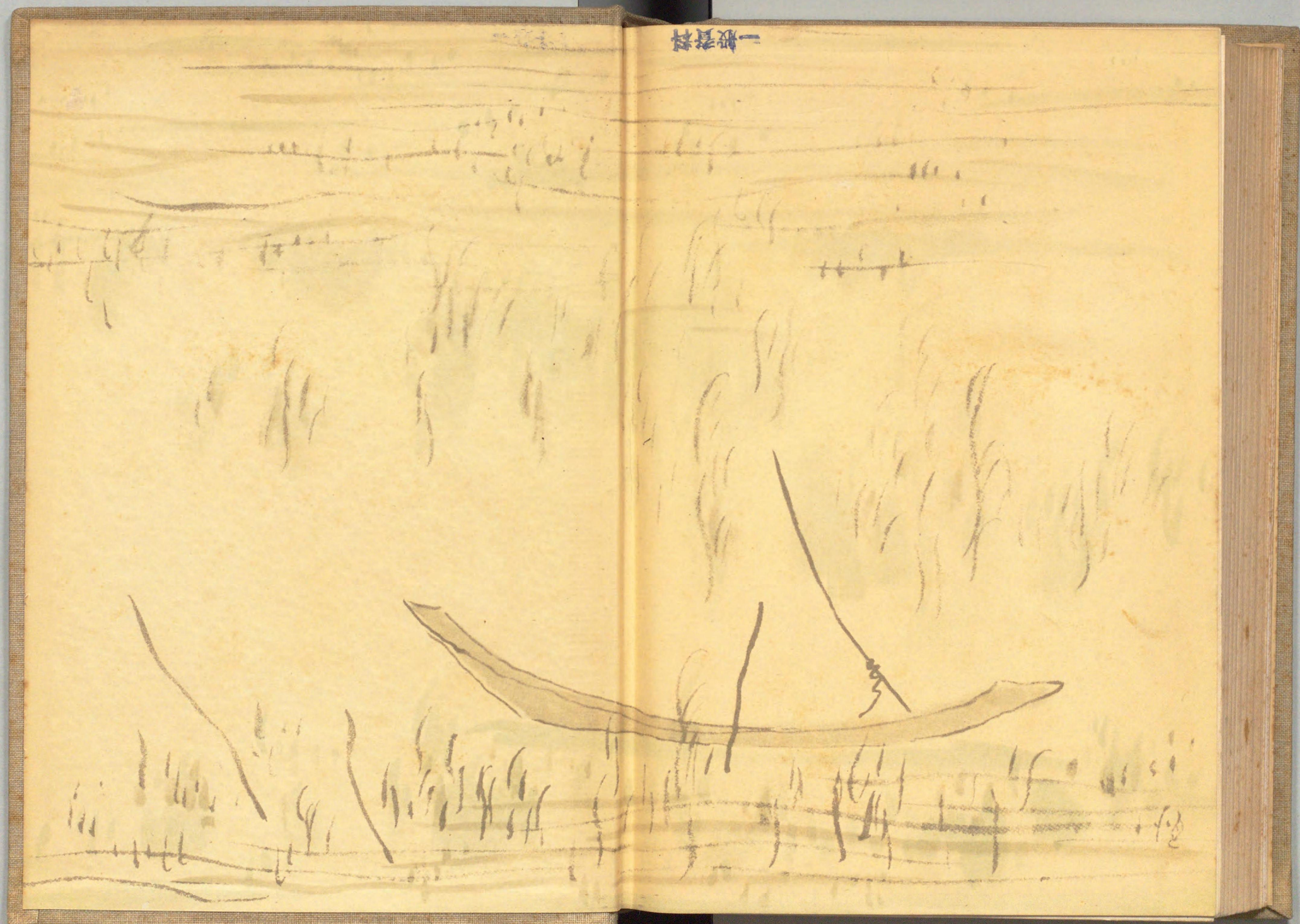
昭和四年十一月五日印刷
昭和四年十一月八日發行

牧水全集　第一卷

著者　若山牧水
發行者　山本三生　東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
印刷者　竹内喜太郎　東京市牛込區榎町七番地

（廣角製本）

日清印刷株式會社印刷

發兌　改造社
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)一一一一番　一一一一番　二二二二番　四三二一番

一般資料